OUHS
OSAKA UNIVERSITY OF HEALTH AND SPORT SCIENCES
スポーツ
大体大
第41号
発行責任者
大阪体育大学広報室
室長　大坪康巳
編集長
大阪府泉南郡熊取町朝代台1-1
電話（072）453－7021
FAX（072）453－8818
協力＝教育後援会・学友会

激闘制す

10連覇!!

ハンドボール部女子

全日本学生ハンドボール選手権大会

高松宮記念杯男子第66回・女子第59回全日本学生ハンドボール選手権大会が11月、北海道函館市で開催され、本学ハンドボール部女子が10大会連続11回目の優勝を果たした。2018年の6連覇達成以来、男女を通じた最長連覇記録を更新し続けている。

ハンドボール部女子は前年まで全日本インカレ9連覇中と、楠本繁生監督が指揮を執って以降、12大会連続で決勝に進出している絶対王者。節目となる10連覇に挑んだ。

初戦で日本体育大学に33―30で勝利し、幸先良いスタートを切ったあと、2回戦では東海学園大学に45―17、準々決勝では東京女子体育大学に39―21と快勝。準決勝では前年に決勝で対峙した東海大学に32―23と順調に勝ち進み、13大会連続の決勝進出を決めた。

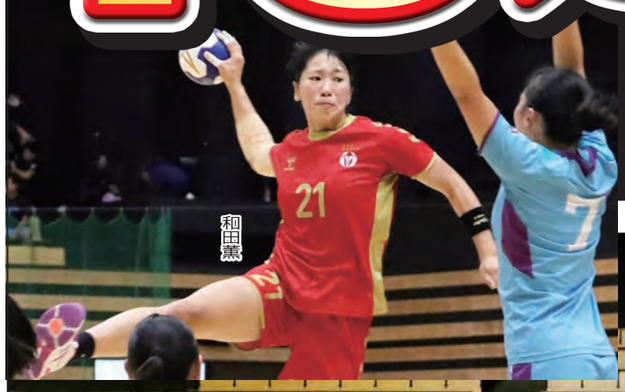
11月8日の決勝は筑波大学との対戦。前半は日本代表として国際大会も豊富に経験する石川空（体育3年）をはじめ、準々決勝、準決勝と高得点で勝利に貢献し、絶好調の和田薫（体育4年）が、それぞれ3得点を挙げる活躍を見せるも、序盤から一進一退の攻防が続き、12―13と1点リードされて試合を折り返した。

後半は高来葵美（体育2年）の得点を皮切りに序盤から攻撃の応酬となり、吉野珊珠（体育3年）の連続得点で逆転したあと、着実に得点を積み重ね、接戦の末26―24で筑波大学に勝利した。

大会10連覇の達成を受け、楠本繁生監督は「4年生を中心にまとまりのあるチームで、最後まで諦めずに粘り強く戦えたことが勝利につながったと思う」と振り返るとともに、「来年のインカレに向け、新しいスタートとして一日一日取り組んでいきたい」と意気込んだ。

藤井愛子主将（体育4年）は「今までやってきたことをすべて出し切って、最後は楽しもうという気持ちだった」と振り返った上で、「新チームにはハンドボールという競技を楽しみながら、11連覇に向け頑張っていってほしい」とエールを送った。

個人表彰では、藤井、石川、和田が優秀選手賞、竹内琉奈（体育4年）が特別賞、楠本繁生監督が優秀監督賞に選ばれた。



ハンドボール部 男子

全日本インカレベスト4 日本選手権ベスト8

全日本学生ハンドボール選手権大会 日本ハンドボール選手権大会

8月の西日本学生選手権で優勝。好調のまま関西学生秋季リーグで9戦全勝と春季リーグに続いて優勝し、11月の全日本インカレに乗り込んだハンドボール部男子。第61回大会以来4大会ぶり11回目の優勝をめざすも、準決勝では中央大学に激闘の末1点差で敗れ、悔しい結果となった。

荒瀬廉

全日本インカレの初戦は明治大学に39―25で勝利。2回戦では大阪経済大学に30―23、準々決勝では日本大学に36―26と順調に勝ち進み、準決勝進出を決めた。

11月7日の準決勝は中央大学との対戦。2年前に決勝で敗れ、前年には準々決勝で阻まれた因縁の中央大学を相手に、序盤から一進一退の攻防が続き、15―16と1点リードされて試合を折り返した。

後半は、序盤に木太隆雅（体育4年）や荒瀬廉（体育3年）らの得点で逆転。その後も一進一退の展開になり、中盤には最大3点差のリードをつけられた。粘り強く追いすがり、残り5秒にも荒瀬が得点を追加したものの、32―33と1点差で敗れた。

梅岡大祐

個人表彰では、準決勝で12得点を挙げた木太が優秀選手賞に選ばれた。

一方、12月の日本選手権では、初戦で富山ドリームスに39―27、2回戦では安芸高田ワクナガハンドボールクラブに32―25と、日本リーグ所属チームを相手に快進撃を続け、大学チームで唯一の準々決勝進出を決めた。

12月15日の準々決勝は豊田合成ブルーファルコンとの対戦。荒瀬が7得点を挙げるなど、強豪チームに食らいついたが、28―50で敗れた。

下川真良監督は「西日本インカレからの流れでチームの成長を感じていたので、悔しい全日本インカレだった。成長を証明しようと臨んだ日本選手権では、日本リーグ所属チームを相手に追いかけられる立場も味わえて良かったと思う。来季への財産になった」と振り返った。

木太隆雅

大学チーム唯一の準々決勝進出（日本選手権）

女子

激闘延長戦 決勝進出ならず

藤井愛子

日本ハンドボール選手権大会

ハンドボール部女子はインカレ10連覇達成翌月の12月、第75回日本選手権（岩手県花巻市）に挑み、日本リーグ勢を連破して準決勝に進出。しかし、3大会ぶりとなる決勝進出は果たせなかった。

本学は1回戦で東海大学に36―18で快勝し、2回戦で日本リーグのオムロンピンディーズと対戦。延長の末、藤井愛子主将（体育4年）が11点を挙げ、26―25で競り勝った。準々決勝も日本リーグの三重バイオレットアイリスに31―26で勝利した。

準決勝は日本リーグのソニーセミコンダクタマニュファクチャリングブルーサクヤと対戦した。後半、この試合チーム最多得点の藤井が左ひざを痛めて退場した後、逆転されたが、終了約7秒前に石川空（体育3年）が同点ゴール。延長戦で本学OGの選手に突き放され、31―35で敗れたが、手に汗握る展開だった。

サッカー部

全日本インカレ惜敗 2回戦 さらなる飛躍期す

関西学生女子サッカー秋季リーグ 全日本大学女子サッカー選手権大会

サッカー部女子は、関西学生女子秋季リーグは5勝1敗1分けで、春季リーグに続いて2位。12月の全日本インカレは初戦で勝利し、2回戦で早稲田大学に0―1で敗れた

東瑞里

平岩依々菜

矢野梨紗

女子

石居亘子監督はリーグ戦について、「学年関係なくお互いが刺激しあって戦い、チーム力が高まった。バックアップも含めて、チームの底上げができた」と振り返る。

矢野梨紗（体育4年）が恵まれたフィジカルを生かし、安定してチームの軸になり、平岩依々菜（体育4年）がゴールを量産。DF清悠香（体育2年）が守備を統率した。1年のDF東瑞里（体育）、MF北原歩奈（体育）も貢献し、第6節まで5勝1分け。無敗対決となった最終節の明治国際医療大学戦は、前半、優勢に試合を進めたが、あと一歩でゴールを逃し、カウンターで失点して0―1と惜敗した。

インカレでは、初戦の新潟医療福祉大学戦は赤尾侑里（体育3年）、矢野、辻原莉音（体育3年）がゴールし、3―2で勝利した。

続く、関東2位の早稲田大学との大一番。石居監督は「立ち上がりから積極的なアクションが功を奏し、互角以上のゲーム内容だった」と話す。前線からタイトな守備をかけて相手のプレーを限定させ、点を取るためにどうボールを奪うかにこだわった。しかし、前半のチャンスに点を取りきれず、後半は相手がポジションを変えて対応し、0―1で惜敗した。

このほか、11月の皇后杯全日本女子サッカー選手権大会もPKの連続となる苦しい予選を勝ち上がり、初戦でなでしこリーグのバニーズ群馬FCに勝利した。

チームの目標は、変わらず「日本一」。来季は主力だった4年生が多数抜ける。石居監督は「悔しさと力不足を真摯に受け止め、全国で戦った経験を新チームがどう活かすか」とさらなる飛躍を期している。

川浪実歩

草場千寛

硬式野球部男子

秋季5位
中野監督30年の指導に幕

中野監督の胴上げ

阪神大学野球秋季リーグ

硬式野球部男子は9～10月に開催された阪神大学野球秋季リーグで、4勝8敗の5位に終わった。また、この秋を最後に30年間野球部を率いた中野和彦監督が引退し、ゼネラルマネジャー（GM）に就任。松平一彦コーチが新監督に就任した。

「率直に悔しい順位。接戦で守りきれない、攻めきれない試合が続いた」と松平新監督は悔やむ。

大阪産業大学との開幕戦は、オープン戦で調子が良かった杉戸理斗（体育4年）を先発に起用し、タイブレークの末、11―4で完投勝利。しかし2戦目、3戦目を落とし、甲南大学との第2節も杉戸の好投で8―1と快勝しながらその後2連敗。杉戸は制球力と、打者をよく見て狙いを外すクレバーな投球で力を発揮したが、その後に続く先発の柱が安定せず、好機を作ってもあと一本が出ない試合が続いた。

苦しい戦いの中で光ったのは、石川楓雅（体育4年）の攻守にわたる活躍だ。3番打者としては、持ち味の速球に強い打撃に加えて中堅返しやボールの見極めの点でも成長し、打率4割5厘で初の首位打者を獲得。遊撃の守備でもスローイングでの強肩と制球が群を抜き、初めてベストナインを獲得した。

10月8日、関西国際大学との最終戦は、中野監督のラストゲームとなり、ほっともっとフィールド神戸には、2006年の全日本大学野球選手権の優勝メンバーの元巨人・米大リーグインディアンス・村田透氏ら多数の卒業生がスタンドに詰めかけ、試合後は相手チームの選手も輪に入って見守る中で胴上げされた。

松平監督は初采配となる春季リーグに向けて、「ポイントは杉戸ら多数が卒業する投手。ディフェンスを強化して無駄な走塁による失点などを防ぎたい」と話す。秋季リーグで中継ぎを中心に登板した岩崎優太（体育3年）、下手投げの尾崎元（体育2年）、長身左腕の林勝宏（体育2年）らの成長が待たれる。

石川楓雅

喜岐有翔

スタンドのOBとともに記念撮影

硬式野球部女子

2大会ベスト4
来季V奪還に期待高まる

左川楓

全日本大学女子硬式野球選手権大会
全日本女子硬式野球選手権大会

硬式野球部女子は8月に和歌山県田辺市などで行われた第13回全日本大学女子選手権大会（インカレ）では、準決勝で尚美学園大学に0―1で敗れ、ベスト4。また、10月の第19回全日本女子選手権大会もベスト4だった。

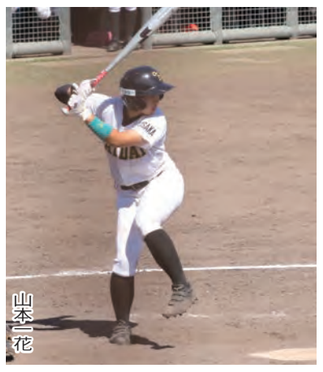
横井光治監督は「インカレはチーム状態もよく、2年ぶりの優勝を狙えるチームだった。悔しい敗戦」と振り返る。

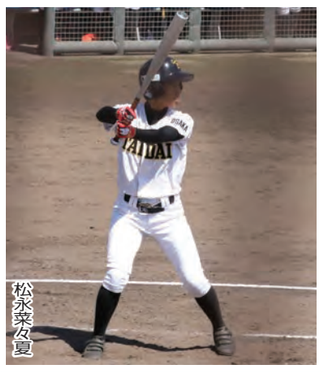
予選リーグを2戦全勝で突破し、決勝トーナメント1回戦は左川楓（体育4年）が好投し、札幌国際大学に3―1で快勝した。準決勝は左川が連投。内角への速球、ツーシームの制球が今季で最も良く、外角も有効に使って相手打線を失策による1点に抑えた。

しかし、打線に後一本が出ず、六回の好機で児玉花梛（体育1年）のスクイズが捕手の前に落ちて失敗する不運もあり、0―1で敗れた。

しかし、全日本選手権ではチームの底力を見せた。1回戦で2連覇中の実業団・エイジェックにタイブレークの末、7―6で勝利。八回表に4点を奪われるとその裏に4点、九回に2点勝ち越されると、3点でサヨナラ勝ちする驚異的な粘りを見せた。準々決勝も東近江バイオレッツに4―3でサヨナラ勝ち。準決勝はタイブレークの末、5―10で敗れたが、阪神タイガースWomenに、0―5から追いつき延長に持ち込んだ。

来季は、エースの左川が卒業するが、柏﨑咲和（体育2年）に加えて、速球派の内田陽菜（体育3年）が台頭。松井望々香新主将（体育3年）のもと、インカレV奪還に期待が高まる。


山本一花


松永菜々夏

白石美優

太田栞

バレーボール部

新チーム移行の過渡期
土気維持し来季へ

関西大学バレーボール秋季リーグ
全日本大学バレーボール男子選手権大会

バレーボール部男子は、関西大学秋季リーグ戦1次リーグで関西学院大学に3―1、神戸学院大学に3―0、関西大学に3―1で勝利し、同志社大学に1―3、天理大学に0―3で敗北。2次リーグ（順位決定戦）は全敗し、1部6位となった。

男子　西野祐司監督は「春季リーグに出場していた主力選手がケガで戦列を離脱し、さらに教育実習やコーチング実習などでメンバーがそろわない状況で、チーム作りとしては苦慮していた。そんな中、春季リーグ戦でエントリーされていなかったメンバーにチャンスがあり、誰が出ても遜色なくプレーできたことは利点として挙げられる。1部リーグで上位に食い込むことができ、全日本インカレの出場権を得ることができてよかった」と振り返る。

個人技術ランキングでは、出水充希（体育2年）がブロック決定本数5位、アタック決定本数8位。松浦和真（体育2年）がサーブレシーブ成功率7位にランクインした。

11月のPhiten CUP関西大学選手権大会（関西インカレ）では、2回戦で明治国際医療大学に2―0で快勝。準々決勝で龍谷大学にフルセットの末、1―2で惜敗し、結果はベスト8だった。

12月の秩父宮賜杯全日本大学選手権大会（全日本インカレ）は、1回戦で東京学芸大学と対戦。20―25、23―25、13―25で敗退した。西野監督は「関東の強豪相手にひるむことなく、コートに立つ選手、ベンチ入りしたスタッフや選手、応援メンバーのそれぞれが役割を果たし、チーム一丸となった。結果は残念だったが、主将の小川永遠（体育4年）を中心に部員たちが持ち前の勢いを生む雰囲気を作った。いま持っている力を出し切った試合だった」と振り返る。

12月9、10日に行われた大阪府学生連盟リル6人制身長制優勝大会では、2チームが出場しAチームが2連覇を飾った。西野監督は「新チーム移行の過渡期で不安があるが、部員たちは士気を維持しプレーできるようになってきている」と話している。

出水充希

丹尾航太郎
榮温輝

篠森勇希

2部全勝優勝から4年ぶり1部昇格
来季は「台風の目」に

関西大学女子バレーボール秋季リーグ

バレーボール部女子は9～10月の関西大学秋季リーグ2部で全勝優勝し、2019年秋以来となる1部昇格を達成した。

女子　リーグ開幕戦の大阪大谷大学戦では3―0のストレート勝ちで白星発進。続く神戸学院大学戦では1セット落としたが3―1で勝利。第3戦の帝塚山学院大学戦では3―0で快勝した。

続く兵庫大学戦、大阪学院大学戦も3―0でストレート勝ち。第6戦の天理大学では1セット落としたものの3―1で勝利。第7戦の芦屋大学戦では接戦が続いたが、3―2で勝利を収め、リーグ戦予選ラウンドを7戦全勝で終えた。

続いて4チームによる上位リーグに進み、芦屋大学に3―1。帝塚山学院大学戦は、前半は相手が優勢だったが後半に巻き返してフルセットの末3―2で逆転勝利となった。最終戦の神戸学院大学も3―0で勝ち、10戦全勝で1部復帰を果たした。

長江晃生監督は「ゲームの中では相手に先行される場面も多かったが、不利な状況でも『劣勢の中で駆け引きを楽しもう』というチームのコンセプトがあり、選手みんなが徹底できていた」と振り返る。主将の坂本千愛（体育4年）、赤澤優花（体育4年）、権藤真実（体育4年）、主務の山田菜々（教育4年）の4年生4人が中心となりチームを引っ張った。

11月の第70回秩父宮妃賜杯全日本大学女子選手権大会では1回戦で日本体育大学に0―3で敗れたが、選手はゲームの駆け引きなど劣勢を楽しみながらプレーできていたという。長江監督は「新4年生を中心としたチーム作りも楽しみ、1部リーグで台風の目になるように」と来季に向けての意気込みを語った。

徳永優奈

山本千尋

増田結子

陸上競技部

メダル・入賞ラッシュ 層の厚さ見せつける

関西学生陸上競技種目別選手権大会兼関西学生混成選手権大会 日本学生陸上競技対校選手権大会

陸上競技部は10月に京都市で開催された関西学生種目別選手権大会兼第45回関西学生混成選手権大会で、6種目で優勝。4種目で2位、4種目で3位に入った。

萩尾脩人

中瀬綺音

下浦大輝

吉田明大

中原鈴

大会では、男子短距離陣が躍動した。100㍍で萩尾脩人（体育3年）が10秒55で1位。110㍍障害でも岩元楓磨（体育4年）が14秒00で1位。400㍍も岩﨑拓生（体育2年）が47秒65で3位に入った。

全国トップクラスの層の厚さを誇る投てき陣も地力を発揮した。初日に男子ハンマー投げで吉田明大（大学院博士前期課程2年）が62㍍55、湯浅可紘（体育4年）が57㍍43、森下海（体育4年）が57㍍31で1～3位に入り、表彰台を独占。3日目に女子円盤投げで中瀬綺音（体育4年）が45㍍18で大会2連覇。最終日は砲丸投げで下浦大輝（大学院博士前期課程2年）が大会新記録の15㍍78、中原鈴（体育1年）が13㍍74で男女同時優勝を果たした。

跳躍では、女子走り高跳びで和田真琉（大学院博士前期課程1年）が1㍍65で3位と健闘した。

このほか、2位には女子やり投げの川合小想（体育2年、46㍍75）、男子砲丸投げの黒田翔貴（体育4年、15㍍49＝大会新）、女子砲丸投げの武田光里（体育1年、13㍍70）が入った。

3位には、男子やり投げの鈴木陸人（体育2年、67㍍29）が入った。

また、9月に埼玉県熊谷市で開催された天皇賜盃第92回日本学生対校選手権大会は、2種目で3位に入った。女子走り高跳びで和田が1㍍73をマークして表彰台。女子円盤投げでは、中瀬が46㍍10をマークし、2年連続の3位となった。

このほか、5人が入賞した。原華澄（体育4年）は女子800㍍で2分8秒99で4位に入り、1500㍍も4分24秒86で5位。男子砲丸投げの下浦が15㍍68で7位、女子砲丸投げの武田が13㍍77で8位。女子ハンマー投げでは、竹谷陸（体育4年）が56㍍21で7位、五十川利心（教育4年）が55㍍31で8位入賞した。女子フィールドの対抗得点で本学は7位に入った。

岩元楓磨

水上競技部

目標はインカレ決勝進出 成長に期待

関西学生選手権水泳競技大会／日本学生選手権水泳競技大会

男子

水上競技部男子は、7月に和歌山市の秋葉山公園県民水泳場で行われた第97回関西学生選手権大会では3種目で3位に入り、総合順位は昨年より1つ上げて3位。それでも川島康弘部長は「世界水泳、ワールドユニバーシティゲームズのため有力選手が欠場したことを考えれば、厳しい結果」と話す。

100㍍背泳ぎで高橋篤広（体育4年）が57秒56、100㍍バタフライで友田和志（体育3年）が54秒20で3位。400㍍メドレーリレーも辻本瑞樹（体育3年）、関悠弥（体育1年）、友田、大山仁天（体育3年）が3分46秒61で3位に入った。高橋は淡々と自分の練習をして調子の波が少なく、友田は昨年から力を付け、ジャパンオープンの標準記録も突破した伸び盛りの選手だ。

8月の第99回日本学生選手権（インカレ）では予選突破を果たせなかったが、新チームになって、同じバタフライの友田と木倉颯太（体育3年）が競り合ってタイムを上げ、ともに1年の自由形・井上輝星（体育）、平泳ぎ・関も成長著しい。リーダーシップのある大山新主将のもと、インカレでの決勝進出を目指している。

枡井萌

友田和志

来季見据え 切磋琢磨

女子

水上競技部女子は、関西学生選手権では1種目で2位、3種目で3位に入り、総合順位は昨年から1つ上げて、16年ぶりの3位。浜上洋平監督は「15人と少ない人数でみんなが得点を重ねた結果」と評価する。400㍍個人メドレーは、枡井萌（体育3年）がストローク長が長く無駄な力が入らない泳ぎで4分57秒98で2位。50㍍自由形は大柄で生粋のスプリンターの水谷楓（体育4年）が27秒06で3位、200㍍個人メドレーは、4泳法ともそつがない青山美咲（体育4年）が2分21秒01で3位。400㍍フリーリレーも、青山、山村莉子（体育3年）、石田十季子（体育4年）、枡井が3分55秒05で3位に入った。

日本インカレは、800㍍フリーリレーで青山、山村、枡井、石田が予選で16位に入り、B決勝に進出。昨年は予選18位でB決勝を逃して涙を流したが、3年の山村、枡井が引退する4年生のため懸命に泳いだという。

来季に向けた目標は、インカレの個人種目でのA決勝、リレーでの800㍍フリーのほか、400㍍メドレーでB決勝進出。山村新主将のもと少人数での切磋琢磨が続く。

女子4×100㍍フリーリレー

男子4×100㍍メドレーリレー

なぎなた部

雪辱のインカレ2部門優勝

全日本学生なぎなた選手権大会／西日本学生なぎなた選手権大会

なぎなた部は8月に長野県佐久市で開催された第62回全日本学生選手権大会で、演技、女子個人の2部門で優勝。無冠に終わった前回大会の雪辱を果たした。

前回は部員が3人に減り、4連覇中だった演技は決勝で敗れた。

しかし、今季は1年生5人が加入して活気づき、好調を持続した。

演技では、河野葵（体育3年）・阿部貞優（体育4年）チームが優勝。途中、うまく息が合わない場面もあったというが、何回も話し合って結果を出し、天川彰子監督は「昨年、連覇が止まってかなりのプレッシャーがあっただろうが、2人でしっかり練習を積んだ成果だ」と話す。

演技競技で優勝した河野（左）・阿部（右）チーム

女子個人は、阿部が実力をいかんなく発揮し、昨年度の優勝者を決勝で破って優勝。昨年は早々に敗れ、天川監督と何度も話し合ったというが、その後、西日本学生選手権大会の優勝をきっかけに、安定感が増した。

西日本学生選手権は、全国の有力大学の大半が参加し、全日本インカレと大差のないレベルの高さがある。今季は、演技の部で神山美完（体育1年）・阿部チームが本学勢として4連覇を達成。全試合が5−0の判定となる圧勝だった。神山は高校時代の実績などから演技に抜てきされ、「どの試合も阿部先輩を信じて、攻めの打突を打つことができた」と振り返る。個人は阿部が2連覇を達成した。

女子個人競技で優勝した阿部（左）

来季は、コロナ禍のころ部員1人だけで部を支えた大黒柱の阿部が卒業する。新主将の河野に重責がかかるが、天川監督は「ずっと阿部を見ながら練習し、誰よりも阿部がやってきたことを知っている」と心配していない。川口知咲季（体育）、高溝遥風（体育）、枡本新（体育）、神山美完（体育）、安永心優（体育）ら1年生が経験を積んだことも好材料。来季のインカレも頂点をみすえた勝負を展開しそうだ。

硬式テニス部

全勝優勝から入替戦、10年ぶり1部復帰

関西大学対抗テニスリーグ

男子

硬式テニス部男子は9月に行われた関西大学対抗リーグの2部で5戦全勝とし、優勝。入替戦で1部6位の立命館大学を5−4で降し、10年ぶりの1部復帰を果たした。

リーグ戦は、初戦の神戸学院大学戦を6−3で勝利。最初のダブルスで串阪達哉（体育3年）・宮崎優良（体育1年）、北昇馬（体育3年）・片山稜太（体育2年）、安藤百次郎（体育4年）・垣内勇星（体育2年）の3組がそろって勝利。シングルスも3勝3敗で6−3で勝利した。その後も龍谷大学に6−3、関西国際大学に7−2、神戸大学に6−3、大阪公立大学に8−1と全勝で優勝した。

入替戦は、ダブルスは北・宮崎組、安藤・垣内組が勝って2勝1敗。シングルスは串阪が勝ったものの、寺崎呼人（体育2年）、片山、羽田峻也（体育2年）が敗れ、3−4。ここから北が勝って追いつき、安藤が第1セットを落としたものの、続く2セットを連取して5−4で勝利。宮地弘太郎監督は「1部復帰まで長かった。昨年も力はあったが、選手の体調不良で苦しんだ。今年は『必ず1部に行ける』と選手がまとまっていたことが大きい」と振り返る。

10〜11月の関西学生地域トーナメントでは、シングルスで串阪が準優勝し、大西が4強、垣内、成松孝彦（体育2年）が8強に入った。ダブルスは、北・宮崎組が優勝し、黒田大洋（体育3年）・寺崎組、片山・成松組が8強。経験を積み重ね、地力を付けつつある。来季に向けて、宮地監督は「来季は、1部で2位に入り、全日本大学王座決定試合の出場を目指す。そのためにも基本を徹底して個人のベースを上げたい」と抱負を語っている。

女子

硬式テニス部女子は、関西大学対抗リーグ2部を2勝3敗で終え、3位。岡村修平監督は「1部を狙っていた大会であり、満足していない。来季こそ昇格を果たす」と誓う。

リーグ戦では、初戦は本学に同志社大学を迎えて2−3とあと一歩。シングルスで、1年生の林妃菜（体育）が勝利。海津美空（体育3年）も関西8強の強豪に勝ち、前田明音（体育4年）はフルセットで負けたが紙一重の試合内容。チーム一丸となった試合だった。その後、武庫川女子大学、甲南大学に敗れたが、神戸松蔭女子学院大学に5−0、関西外国語大学に3−2で勝利。2勝3敗で武庫川女子大学、関西外国語大学と並び、ポイント数などで3位となった。

また、8月の全日本インカレは前田、海津が予選に進み、本戦進出は果たせなかった。しかし、前田は1戦目で関東新進チャンピオンの駒澤大学の選手に勝ち、決勝も法政大学の強豪選手と最終セットまで競り合い、成長の跡を感じさせた。

来季での1部昇格に向け、岡村監督は「フィジカル面を強化したい」と話す。リーグ戦では試合終盤にけいれんを起こすなどスタミナで課題が残り、最後まで体力が落ちなかった1位の甲南大学、2位の同志社大学との違いが目立った。川西由芽（体育2年）、川村夏音（体育1年）ら若手も伸びつつあり、巻き返しが期待される。

体操競技部

インカレ個人4種目入賞

インカレ団体7位入賞

体操競技部男子は、8月に長野市で開催された第77回全日本学生選手権大会の団体総合で9位。2年前に1部昇格、前回は史上最高の5位と飛躍しただけに順位としては後退したかたちとなったが、藤原敏行監督は「目標は果たせなかったが、1部9位を残念と思えるのは、近年のレベル向上の裏返しでもある。力がついていることは確かだ」と前向きに話す。

全日本学生体操競技選手権大会

男子

田部壮一郎（体育3年）が個人総合7位入賞、得意のつり輪で4位と安定した力を発揮した。入学時には課題があったあん馬で成長したのが大きく、新しい技にも着実に挑戦している。昨年、ハンガリーであった国際大会で日本代表派遣メンバーに選ばれたのも自信につながったようだ。その後、9月に行われた国民体育大会でも大阪府代表として、3位入賞に貢献した。

上田遥介　築山翔馬

築山翔馬（体育2年）は跳馬で6位、ゆかで7位入賞。得意のゆかでの2連覇は逃したが、あん馬、つり輪の演技も素晴らしい内容だった。

新チームでは、田部が主将を務める。モチベーションの部分で波がなく、真摯に練習に取り組む姿勢が、チームに好影響を与えているという。チームは、来年度入学予定の大阪体育大学浪商高校の選手をいち早くメンバーに入れて練習しているが、これも田部からの提案だという。

また、12月にはカナダ・ブリティッシュコロンビア州の代表選手を招いて競技会「2023 OUHS GYMNASTICS INVITATIONAL」を開催。出場した部員もメンバー外の部員も全員で運営にあたり、有料ながら体操競技場に満席の約350人を集めた。チームの一体感や士気を高める点でも貴重な機会となった。

上田壱晟

田部壮一郎

全日本学生体操競技選手権大会

体操競技部女子は第77回全日本学生選手権大会（1部）の団体総合で7位と昨年から順位を一つ上げたが、目標だった全日本団体選手権の出場には至らなかった。今年は6位の駒澤大学から11位の中京大学までの6大学がわずか1・535点差の近年稀に見る混戦となり1つのミスで大きく順位が変わる大会であった。

女子

田原宏晃監督は「明らかな大きな失敗は段違い平行棒1つのみで、みんなで耐え凌ぎ、24演技を繋ぐことができた結果だ」と振り返る。1種目目の跳馬は62・898点（全体7位）と良いスタートを切ったが、2種目目の段違い平行棒では、1番手の大野帆加（体育3年）が落下。その後、失敗が許されない状況の中、他のメンバーが耐え凌ぎ繋いだ。次の平均台は落下の危険性が最も高い種目であるが、落下なく全員が繋ぎ（全体5位）、最終種目ゆかもミスなく終えた。

蔦愛美

北ひなた

北田絢女（体育3年）はノーミスで個人総合17位。関西インカレ個人総合優勝、西日本インカレ個人総合2位の力を発揮し、西日本に所属する大学勢の中でトップの成績でチームを引っ張った。

横江恵（体育2年）も個人総合37位と健闘。昨年、腰痛で出場できず今回初の全日本インカレであったが、得意の平均台に加えて、今季強化した跳馬も持っている力を発揮した。

団体メンバーで唯一の4年生だった春内琴美（体育）、昨年はけがで個人出場となった大野、1年生の近藤環（体育）、蔦愛美（体育）も力を出した。その裏には、キャプテンでチームのエース格だった吉田菜々花（腰椎ヘルニアにより不出場）や木下緋彩、梅尾梨々花（ともに体育）の4年生の存在があった。田原監督は「4年生のサポートの貢献度は非常に高く、チーム一丸になれた要因」と話す。

北田絢女

新チームの主将は北田が務める。全日本個人総合選手権（4月）への高校時代を含めた5年連続出場が、12月になって決まった。主将の重責が加わり、これまでとは違う立場で5回目の全日本個人総合選手権に挑戦する。

来季の目標は昨年と同じく関西インカレ、西日本インカレ団体優勝、全日本インカレベスト8位以内、そして全日本団体総合選手権の出場。田原監督は「春までにDスコアをどこまで上げられるかが勝負」と技の難易度アップに取り組んでいる。

剣道部

見据える来季

関西学生剣道優勝大会／全日本学生剣道優勝大会

剣道部男子は9月の第71回関西学生優勝大会で4強。10月の全日本学生優勝大会は1回戦で姿を消した。

佐々木俊

男子 関西学生大会は、初戦で甲南大学を6―0、2戦目で大阪工業大学に4―1、準々決勝は大阪産業大学を6―0で降して準決勝に進んだ。

関西大学との準決勝は、1年生ながら相手を冷静に見て思い切ってポイントを取り、先鋒に抜擢された佐々木俊（体育）が期待通りに勝ったが、後が続かず、2―4で敗戦。今季は飛びぬけた選手がおらず、選手外のメンバーや応援も味方につけた一体感で準々決勝まで勝ち上がってきたが、村上雷多監督は「改めて拍手のみの応援が徹底され、しんとした雰囲気の試合ではそれまでの勢いや技が止まり、地力のなさを痛感した」と振り返る。

10月の全日本学生大会は1回戦で国学院大学と対戦。先鋒の佐々木が1本を取ったが、その後は各選手が力を出し切れず、引き分ければ勝利の大将戦で2本取られ、1―1、本数1―2で逆転負けとなった。

しかし、3年生以下の新チームによる11月の若木杯争奪関西学生剣道大会は龍谷大学、大阪経済大学、関西福祉大学を降して勝ち上がり、準決勝で同志社大学に3―2、決勝で天理大学に3―2で勝って優勝。決勝では、新戦力として次鋒に攻撃力のある松原正明（体育1年）、中堅に防御の固い三浦幸志朗（体育3年）が出場した。

村上監督は、「今季はしっかり構え、攻めて打ち切る剣道が徹底できず、守りに入り、中途半端な技を出していた。来季に向けて、もちろん目標は優勝だが、誰が見ても『体大は違う』と憧れられるような剣道を目指す」と話している。

菊池金太郎

長谷川碩亮

伊東凜太郎

全日本、16強

関西女子学生剣道優勝大会／全日本女子学生剣道優勝大会

剣道部女子は9月の関西女子学生優勝大会で3年連続で決勝に進み、昨年に続いて準優勝した。11月の全日本女子学生優勝大会は16強。山中恵里監督は「大会前、練習試合で勝てない日々が続いただけに、関西準優勝に選手の底力を見た」と高く評価した。

湯川愛梨

繁野萌々香

女子 関西女子学生では、1年生の加藤千恵（体育）・2年生の湯川愛梨（体育）の奮闘が光った。両名は先鋒、次鋒でチームへ流れを運ぶ役割を果たした。特に関西大学との準々決勝は、加藤がものおじしない柔軟な剣道で勝利すると、先輩たちが1年生の勝利に奮い立って3―0で勝利した。

準決勝は、昨年の若木杯で敗れ、練習試合でもなかなか勝てない園田学園女子大学と対戦したが、準々決勝での勝利で勢いづいて2―0で勝利した。

関西学院大学との決勝で光ったのは、繁野萌々香（体育4年）だ。試合は1―2で敗れ、2年ぶりの優勝は果たせなかったが、副将として勝利し、一度はタイに持ち込んだ。

全日本大会の前も、チームは練習試合でなかなか勝てず不安を感じて臨んだという。それでも、1回戦は中部学院大学を4―1で降した。国際武道大学との2回戦は、繁野が勝ち、1―0で勝利した。

3回戦は環太平洋大学に1―2で敗れた。

山中監督は繁野の成長について、ひたむきに努力を続け、今季は副将として大将の堀由美恵（体育4年）に回そうと、泥臭く一本に執着する姿勢が強まったという。

新チームで始動する来季。関西女王奪還のためには、若手の台頭が待たれる。

堀由美恵

渋谷志乃

柔道部

全国への誓い果たすも 高み目指すチーム作りを

関西学生柔道体重別選手権大会／全日本学生柔道体重別団体優勝大会

柔道部女子は8月の第35回関西学生女子体重別選手権大会で、63キロ以下級の中本真奈美（体育2年）が4強、57キロ以下級の久保純奈（体育1年）が8強に進出し、9月の全日本学生体重別選手に出場。また、10月の全日本学生体重別団体優勝大会も2年ぶりの出場を果たした。

辻野いづみ

中本真奈美

女子 昨年度は関西学生で振るわず、全日本の体重別選手権も、団体優勝大会も出場を逃した。チームは関西学生での「敗戦」の後、唯一の現4年生で主将の西尾碧（体育）を全日本学生柔道体重別団体優勝大会に連れていくと誓って1年間練習に励み、誓いを果たした。

関西学生で4強、8強に入った中本と久保は、全日本学生はいずれも他選手の欠場などを受け、繰り上がりで出場権を得た。中本は全日本1回戦で国士舘大学選手にゴールデンスコア（GS）の末、指導3回で勝利。指導2回となった後、無理に攻めず3回目の指導を狙う切り替えができたといい、元々地力のある柔道に、この1年で冷静さが加わった。

久保はひざを痛めて手術を予定していたが、インカレ出場が決まると医師とも相談して出場。1回戦でGSの末に勝利し、松田基子監督は「インカレの舞台の経験は今後に活きる」と大器のさらなる成長に期待する。

全日本学生柔道体重別団体優勝大会は、関西学生で天理大学とポイントで並び、抽選の末に最後の4枠目をつかんで出場。初戦で中京大学に5―2で勝利し、2回戦で桐蔭横浜大学に1―4で敗れた。

松田監督は「何とか全国に進み、ここまで頑張ったらどうなるという道筋は見えた。次年度に向け、コンスタントに全国に進めるチーム作りを目指す」と話している。

久保純奈

西尾碧

全体の底上げも 目指すは全国での躍進

関西学生柔道体重別選手権大会

8月に行われた個人戦の第42回関西学生柔道体重別選手権大会。柔道部男子はベスト8に2人、ベスト16に6人が進出。2年ぶりに全日本学生柔道体重別団体優勝大会（10月）の出場権を獲得した。

河野沢水

塩田夕賀

男子 今年は8ポイントを獲得し、順位は5位。昨年の3ポイント11位からステップアップ。生田秀和監督は「多くの階級でベスト16に進むことができた。飛びぬけた選手はいないが、全体的な底上げはできた」と話す。

60キロ級の塩田夕賀（体育1年）、73キロ級の河野沢水（体育2年）はベスト8に進み、出場選手が多かった河野は全日本学生体重別選手権の出場権を獲得した（1回戦で敗退）。

河野は内また、大内刈りなど足技が得意で1本を取る力がある選手。塩田は1年ながら試合勘がいい。66キロ級16強の廣田智大（体育3年）は技に入るスピードが速く瞬発的な力があり、90キロ級16強の岩崎竜也（体育3年）は右も左もできる変則的な柔道が持ち味だ。

しかし、全日本学生団体優勝大会では、1回戦で広島大学に4―1で勝ったが、2回戦で国学院大学に0―5で敗退。関東の強豪との対戦では、組手の強さで劣勢に回る場面が目立った。

新チームでは、中川宗一郎（教育1年）ら新戦力もメンバーに加わり、10月の大阪府下大学対抗柔道大会では3位に入った。豊富な練習量で力をつけてきた新田一心新主将（体育3年）のリーダーシップのもと、課題の組手の強化などに励む。生田監督は「今年逃した全日本学生優勝大会の出場を目指す」と話している。

廣田智大

岩崎竜也

悔しさ糧に来季へ

関西女子学生バスケットボールリーグ／全日本大学バスケットボール選手権大会

バスケットボール部女子は関西女子学生リーグ1部で5位となり、迎えた12月の全日本大学選手権では2回戦で敗退と悔しい結果となった。

日高ひかる

アィエビドゥン・グレイス

女子　関西女子学生リーグの1次リーグは5勝4敗の5位。続いてリーグの上位で争う2次リーグでは、1次リーグで敗れた武庫川女子大学、立命館大学、関西学院大学に快勝した。

最終戦となった10月29日の大阪人間科学大学戦では、日高ひかる（体育3年）が20得点を挙げる活躍を見せるも、55―57で惜敗。2次リーグでは3勝1敗の成績を収めたが、1次と2次の合計の勝ち点で1部5位にとどまった。

三次真歩

個人賞では、日高が優秀選手賞、34本のフリースローを決めたアィエビドゥン・グレイス（体育1年）がフリースロー王に選ばれた。

一方、全日本インカレでは、12月6日の初戦で北陸大学と対戦。第2クオーターからリードを広げ、グレイスが19得点、日高が16得点、得田歩菜（体育4年）が14得点を挙げるなど、63―56で勝利した。

2回戦の東京医療保健大学戦では、日高と三次真歩（体育1年）がそれぞれ18得点を挙げる活躍を見せるも、第1クオーターでの点差が埋まらず、66―84で敗れた。

村上なおみ監督は「持ち味である厳しいディフェンスを徹底して速い展開で得点につなげていこうと、原点に戻って大会に臨んだ。結果は結果だが、次年度に向けていい試合ができたという印象。1年通して課題も見えた」と振り返った。

「1年生から試合に出ている日高も4年生になる。グレイス、三次といった新入インカレ優勝メンバーら、今年度を経験した選手がほとんど残るので、次年度は結果を求めて試合に臨みたい」と意気込んだ。

得田歩菜

来季は更にスピード感

バスケットボール部

関西学生バスケットボールリーグ／全日本大学バスケットボール選手権大会

バスケットボール部男子は、9～11月の関西学生バスケットボールリーグ（1部）を9勝5敗で終え、1部5位となった。個人タイトルでは、下田平翔（体育4年）が優秀選手賞、リヴァース怜央（体育1年）が新人賞を受賞した。また、2年ぶりに出場した12月の全日本大学選手権大会では、日本経済大学に敗れ予選敗退となった。

下田平翔

リヴァース怜央

仲田泰利

男子　リーグ戦は2連敗スタートとなったが、3戦目の龍谷大学戦で関西選手権に続いて勝利を収め、この試合からチームの勢いがついた。比嘉靖監督は「3戦目の勝たないといけない試合で、エースの下田平が勝負どころでショットを決め、29得点を挙げて勝利し連敗を止めたことは大きかった」と振り返る。

また、続くリーグ優勝した大阪産業大学との対戦では、練習してきたことをコートで発揮して98―93で勝利を掴み、5年間敗れていた近畿大学にも勝って連勝出来たことが大きかった。

佐野悠星

比嘉監督は「昨年のリーグ戦での反省を1年越しにしっかり達成したことが全日本インカレ出場へつながった」と話す。昨年のエースガードが抜けたあと、佐野悠星（体育3年）がそのポジションを埋め、仲田泰利（体育4年）、山田大智（体育2年）、南口皐（体育2年）、リヴァースらが主力としてチームを引っ張った。

全日本インカレでは、西日本チャンピオンの日本経済大学との対戦で敗れ、予選敗退となった。比嘉監督は、「予選リーグで日本経済大学に敗れ、西日本インカレでも大差で敗れたが、力のあるチームと2回対戦できたことはいい経験になった」と話した。来季は、今季よりも更にスピード感ある試合展開を目指す。

入替戦、5年ぶりのA昇格ならず

ラグビー部

関西大学ラグビーリーグ

ラグビー部は11月の関西大学Bリーグ優勝決定戦で龍谷大学を38―28で降し、2年ぶりのBリーグ優勝を果たした。しかし、12月の入替戦では、Aリーグ最下位の同志社大学に21―62で敗れ、5年ぶりのAリーグ昇格は果たせなかった。

入替戦のスタンドは日本一4回の名門・同志社と、全国大学選手権4強の実績を持つ古豪・大体大との対戦とあって、約1400人の観衆で埋まった。

試合は、前半からFW、BKとも1対1でのコンタクトの圧力で劣勢に回った。反則から相手ボールのラインアウトを招きモールを押し込まれてトライを許す場面も多く、前半は0―38と圧倒された。

後半はキックを使わずボールをつなぐことに徹し、後半5分、相手反則から得たラインアウトからモールを組んで押し込み、堀田凌永（体育3年）がトライし初得点を挙げた。12分には林哲大（体育2年）、21分にはシオネ・マウ（体育3年）がトライ。21―62と大差がついたが、後半だけなら21―24と互角に渡り合い、生駒創大郎主将（体育4年）は試合後の記者会見で「後半は自分たちのラグビーで勝負でき、同志社大学相手にも通用することが分かって、うれしかった」と胸を張った。

ラグビー部は、あごの骨折で戦列を離れた共同主将の原透和（体育4年）が、入替戦では退院を早めて試合前練習の補助や試合中のウオーターボーイ役としてチームをサポートするなど、全部員が総力を挙げて勝利を目指した。

名門に挑み、跳ね返された一戦が、ヘラクレス軍団復活に向けてどう作用していくのか、来季に注目したい。

Planetary Boundaries

ダンス部

ダンス部は11月、第48回単独公演「プラネタリーバウンダリー」を高石市のアプラたかいし（たかいし市民文化会館）で開催した。会場の450席はほぼ満席となる盛況だった。

公演では、ダンス部員15人、卒業生らが出演。3部構成で13作品が上演された。

公演では、3クラブ合同のコラボ作品「Scrambl e!!」が注目を集めた。2年連続参加となるサッカー部男子約50人、初参加の新体操部2人と共演。ミュージカル「ウェスト・サイド・ストーリー」のように、別の色のユニホームを着た3グループが張り合い、最後は一つになった。サッカー部は「選手に、人前で自分を出させたい」と加わり、10月ごろから週1回、ダンス部と練習を重ねてきたという。

公演を観た他校の指導者や研究者から、白井麻子監督には「他のクラブを巻き込み成功させたエネルギーがすごい」「ゲストとして招くのではなく、いっしょに演じたことを評価したい」などの感想が寄せられた。

白井監督は「ダンス部員のアスリートとしての身体性を他部にも見てもらいたかった。様々な部のアスリートが一緒に踊り、それぞれの身体を認め合うことは、時代に合っている」と話す。

公演名でもある「プラネタリーバウンダリー（地球の限界）」は十数分の大作。サブタイトルの「人類と地球は同じ一つの生命体。その限界点は、人類の発展により迫っている」ことを12人で演じきった。

サッカー部男子

今季の苦しさ糧に 来季巻き返しへ

佐藤陽成

関西学生サッカーリーグ

サッカー部男子は4月から11月まで続いた関西学生リーグを10勝10敗2分け、勝ち点32で終え、5位。全日本大学選手権の出場資格を得る4位にあと一歩及ばず、3年連続でインカレ出場を逃した（2020年はリーグ優勝も、インカレは新型コロナで中止）。

総理大臣杯全日本大学サッカートーナメントも、関西学生選手権の2戦目で敗れて予選敗退。松尾元太監督は「全国大会に出場できないことが悔しい。チームが成長する機会を逃した」と話す。

リーグ戦は、前期は古山兼悟（体育3年）、木戸柊摩（体育3年）がチームをけん引して6勝3敗2分けで4位とインカレ圏内にとどまった。しかし、8月に始まった後期では、開幕から阪南大学、びわこ成蹊スポーツ大学、同志社大学に3連敗。その後は勝ち、勝ち、負け、勝ちと持ち直したが、10月25日の大阪学院大学戦から3連敗。大阪学院大学戦から、負傷していたり、疲労が残っていたりしたメンバーを外し、パフォーマンスの良かった選手を起用したが結果が出ず、松尾監督は「あれがターニングポイントになった」と反省する。

その中で、前期は骨折で離脱していた佐野竜貴（体育2年）は復帰戦でトップ下を務め勝利に貢献した。DFでは藤井斎（体育2年）、峰田祐哉（体育3年）がセンターバックとして経験を積んだ。FWの佐藤陽成（体育2年）も豊富な運動量でチームに貢献した。

Jリーグ内定選手の古山、木戸に加え、今季経験を積んだ選手が成長すれば、来季の巻き返しも期待できる。松尾監督は「今季の苦しさが来季につながれば」と全国大会返り咲き、さらには決勝の舞台を目指す。

佐野竜貴

峰田祐哉

藤井斎

FW古山兼悟（体育学部3年）、J1・セレッソ大阪に MF木戸柊摩（体育学部3年）、J1・北海道コンサドーレ札幌に 内定

ガッツポーズする2選手

12月11日、本学サッカー部男子のJリーグ内定2選手の記者会見を対面とオンラインのハイブリッド型で開催した。

サッカー部男子では、いずれも体育学部3年のFW古山兼悟がJ1・セレッソ大阪に、MF木戸柊摩がJ1・北海道コンサドーレ札幌に2025年シーズンから加入することが内定。2選手とも大学に所属したままJリーグの公式戦に出場できる特別指定選手としても登録され、すでに試合や練習などに参加している。

記者会見では、原田宗彦学長が「2選手を輩出できることを嬉しく思っている。プロへ足を一歩踏み出したというところだが、ぜひ頑張ってほしい」とあいさつ。

サッカー部男子の松尾元太監督は「古山は志が高く、闘争心を持って戦える選手。木戸は攻撃時にタメを作ることができる選手」と各選手の特徴を紹介した上で、「それぞれのチームで活躍することはもちろん、日本を代表して世界の舞台で戦い、活躍する姿を見せてほしい」と激励した。

続いて、古山が「入団した際にはコンスタントに試合に出場し、得点し続けたい」と抱負を述べ、木戸が「夢であったプロサッカー選手のスタートラインに立てたことを嬉しく思う」と感謝を伝えた。

会見には両チームのスカウト担当も参加し、セレッソ大阪チーム統括部スカウトグループ長の野口裕司氏が「日本代表として世界に飛び出していくような選手になってもらえたら」と、北海道コンサドーレ札幌フットボール部スカウト担当の鈴木智樹氏が「プレー強度が求められる中だが、ボールを持った時の面白さを表現してほしい」と期待を寄せた。

記者会見の様子

古山兼悟

コンスタントに試合に出場し、得点し続けたい

木戸柊摩

スタートラインに立てたことを嬉しく思う

「世界の舞台で戦い、活躍する姿を見せてほしい」と松尾監督

2選手に期待を寄せた

水上競技部

宇津木、アジアパラ 銀メダル×4

パラ五輪見据え突っ走る

水上競技部女子の宇津木美都（教育3年）が10月に中国・杭州で開催されたアジアパラ競技大会に、競泳日本代表の主将として参加し、銀メダル4個を獲得した。

銀に悔しさも、自己ベスト更新

アジアパラ競技大会

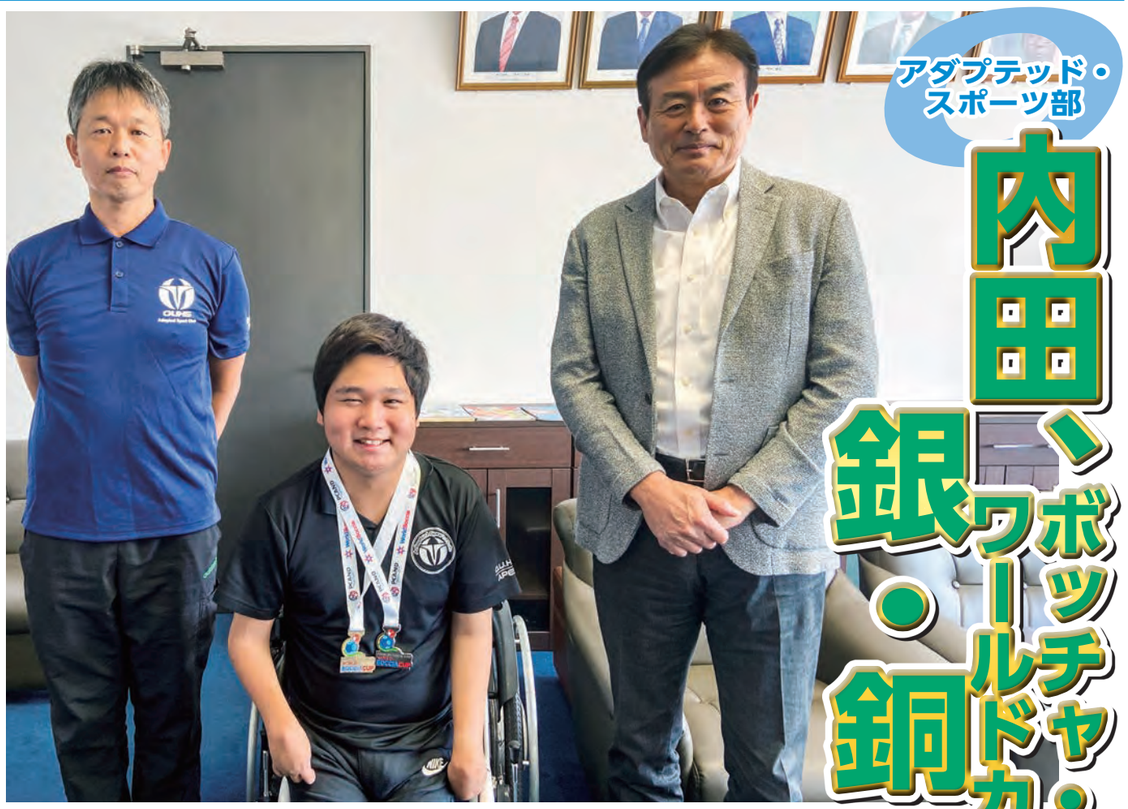
宇津木は100m平泳ぎ（SB8）で1分27秒62、100m背泳ぎ（S9）で1分18秒86、400mメドレーリレーで4分49秒76、400mフリーリレーで4分28秒64のタイムをマークし、それぞれ2位に入った。さらに、100mの背泳ぎ、自由形、バタフライの3種目で自己ベストをマークした。

宇津木は、東京パラリンピックで6位入賞した100m平泳ぎで1位を逃したことについて、「正直言って金メダルを狙っていたので、悔しい気持ちは残る」と振り返る。

それでも「3種目で自己ベストを更新し、しっかりタイムを残すことができた」と話し、パリパラリンピックに向けて、「3月にも予想される選考会に向けて突っ走っていきたい」と意気込んでいる。

アダプテッド・スポーツ部

内田、ボッチャ・ワールドカップ 銀・銅



ポルトガル・パヴォアで10月に開催されたボッチャ・ワールドカップで、アダプテッド・スポーツ部の内田峻介（教育3年）がBC4クラスの個人で銀メダル、ペアで銅メダルを獲得した。

ボッチャワールドカップ

大会前に教育実習 子どもたちの応援、力に

内田は個人では、予選プールD組を2戦全勝で通過し、準々決勝はイギリス選手に4―1、準決勝でドイツ選手に7―4で勝利。決勝は世界ランキング4位で東京パラリンピック銀メダルのラルプエン選手（タイ）と対戦し、1―4で敗れた。

ペアでは、唐司あみ選手（東洋大学）とペアを組み、クロアチアとの3位決定戦で7―0と完勝した。

内田は大会後、メダルを持参して原田宗彦学長に結果を報告した。大会前に約4週間、地元の熊取町立小学校で教育実習に参加し、国語、算数、社会などを教えたという。練習は週に1回ぐらいしかできなかったが、「授業を受け持った5年生の児童から『絶対に金を取ってきて』と励まされたのが力になりました」と話していた。